

## ベアナドッテゴードン北地区センター

内山美知子

### 三角屋根のモダンなデザイン

8月22日(火)私たち高齢者福祉視察グループは、ロスキレ市の高齢者ケアを3地区に分けて担当する1つ、ベアナドッテゴードン北地区センターへ通訳の妙子さんと一緒にバスで行きました。

建物に入っすぐ目をひいたのは中央吹き抜けの三角ピラミッド状のガラス屋根を支える枠組みの美しさでした。真下の広い食堂はとても明るく、モダンなデザインの照明器具がいくつも下がり、二階が回廊になっていて、その周りが居室(介護住宅)です。帰りに外観を見ましたら、ガラスのピラミッドをのせた建物が4棟かたまっていました。30年前に建てられたとは思えない現代的なデザインに目を見張りました。



車椅子の男性の部屋を訪問

### ベアナドッテゴードンの由来

説明に出てこられたエミー・ライトフテさんは看護師として40年のキャリアを持ち、ここの施設長を2年半前まで15年間も勤められた方でした。6年前に日本に来られて日

野でも講演されたとか、とても親しげに話されました。

ベアナドッテゴードンという個人名のような名称の由来を興味深く聞きました。

第二次世界大戦でドイツ軍がデンマークに侵攻した時、デンマークは無抵抗のまま1日で占領されてしまったそうです。その後レジスタンスが地下組織を作って行われたとのことです。

空襲による被害は、コペンハーゲンに置かれたナチ本部を標的としたイギリス空軍が学校を誤爆したため犠牲者が出たそうです。

### 1945年当時の日本と重ねて想像

私自身、1945年、13歳の時に岐阜市で焼夷弾の雨の中を逃げのびた経験を持っているので、初めて聞くデンマークの当時の状態は、日本が毎晩の空襲で殆どの都市が焼け野原と化した当時のことと重ねて想像してしまいます。

### デンマークの捕虜には死者が少なかった

抵抗運動をしていた人が捉えられて、ドイツ各地の捕虜収容所に送られていたのを、ベアナドッテ伯爵(スウェーデンの名門貴族)がその外交力によってナチとの交渉で救出した話です。その方法はまず点在していた捕虜をハンブルグ1カ所にまとめること、次に中立国(スウェーデン)へ全員連れて行くことを約束させ、終戦(5月9日)間際の4月に白い赤十字バスで運んで生還させたということです。

戦時中、捕虜を支援するために送った、赤十字パックの中身にタバコが喜ばれたのは、それによって重労働が免除されたとか、戦争中でもワイロが効いたなど一寸面白い話でした。デンマークの捕虜に死亡者が少なかったのは、そのせいではないかと言われました。

### 捕虜の恩人を記念して命名

戦後、生還捕虜の中に強制収容所シンドロームで夜中にうなされたり、身体的な影響を現す人が出てきて、こうした人のために生還捕虜財団とロスキレ市が1976年にこの施設を作り、捕虜の恩人ベアナドッテ伯を記念して命名されました。

強制収容所シンドロームの扱いについては特別の配慮が必要で、スタッフはドイツの収容所があった所を見学に行くなど研修をつんでいます。

### 高齢者住宅を併設

5年前まで法人組織で自主管理だったこの施設はロスキレ市に移管されました。

そのため建物の中にある介護住宅には30名のレジスタンス関係者と30名の一般市民が入居しています。その他は在宅のデイホームやりハビリに使われています。外には高齢者住宅53戸が5~6軒ずつの長屋として建っています。

### 入居基準

こうした施設に入ったり、その他のサービスを受けるには、判定委員会の審査が必要で、現在デイホームに40人、在宅ケアは400人が受けています。

### 看護職員は

日勤	07:00 ~ 15:00	1 ブロック 20 人を	3 ~ 4 人
準夜勤	15:00 ~ 23:00	1 ブロック 20 人を	2 人
深夜勤	23:00 ~ 07:00	3 ブロック 60 人を	4 人
この他に訪問看護師や PT、OT などのスタッフがいます。			



前ページの男性の居間、シンプルだ

### 食事は不評

食事はセンターで作って冷蔵配食、温めて出す方式です。5~6年前までは施設で作っていたのに、不評だが仕方ないと言われました。

1日の生活リズムは決められていますが、かなり個人の自由が認められているようです。年間の計画には食事会やバスツアーなどのイベントもあります。

### 合併による人口増と課題

自治体改革で来年1月1日から合併が行われ、人口も54,000人から75,000人になる予定で、合併後の施設の行方はわからない。現在予算が増えているのに現場では実感がない。介護スタッフを増して欲しいというのが願いです、とエミーさんは最後にこう結ばれました。

## レジスタンスの仲間

このあと館内見学。最初に男の人達が7～8人集ってお茶を飲んでいるところへ行ってグディと挨拶を交わしました。ここはレジスタンス関係者が中心なので、他の施設より男性が多いそうです。中にドイツのブッヘンワルト収容所にいたという人がいて、私は20年前そこを見学したことがあったので、片言の英語で「私もそこへ行ったことがあります」と言いましたら変な顔をされました。「私が収容されていた」と勘違いされたと判り「見学に行った」と直すと納得、握手してしまいました。



(高齢者住宅のテラス)

## 高齢者住宅訪問

リハビリ施設で何人かの人々がトレーニングしているところや誰もいない広いプールを見ました。

外へ出て高齢者住宅の見学です。最初はクリスチャンセンさんご夫妻のお宅、狭い玄関を入ると、中はとても広く、どの部屋にも壁に大きな油絵がかけられ棚の上には彫刻が飾られていたり、壁の一角にはご家族の写真が何枚か貼ってあったりして居間も寝室も食堂もキッチンもきれいに整っているのに感心しました。テラスには白で統一したパラソルとテーブルセットがあって、きれいな鉢の花々と共に垣根の外の木立にとけこんでいました。83㎡の家というと29坪位です。ご主人のカイさんは84歳、レジスタンスの

時新聞を作っていたとか、奥さんのミンナさん82歳は乳母車の下に武器をかくして運んだとか、今思うとゾッとすると言われましたが、ジョークを交えて仲睦まじく話されるお二人でした。

## 車いす用のキッチンで自炊

次に訪問したのは、片足切断で車いすの独り暮らし男性のお宅。やはり壁に絵が、一番大きい風景画は別れた奥さんの作品とか。とても陽気なソナスゴーさんは毎日車いすで30kmも外を動きまわり、車いす用のキッチンで自炊していると誇らしげでした。

## 唯一のご自慢「私のロールスロイス」

本館の中の介護住宅では、少しウツのあるというランドスフォーレンセンさんのお宅でした。独り暮らしの男性で言葉の少ない大柄な方でしたが、壁には現代画家のモダンなポスターが額装して油絵と並んでいたり、焼物の壺や人形が置かれ、黒革ばりの立派な応接セットがあるお住まいでした。

唯一のご自慢「私のロールスロイス」という電動車いすが玄関前の廊下でピカピカ光っていましたが、時速20km、一回の充電で走行距離は30kmだそうです。

## 福祉を誰もが平等に受けられる国

三軒のお宅を見てどこも清潔で個性的なインテリアの部屋でゆったりと暮らしている方ばかり。働く人達も忙しく走りまわる人など見あたらず、ゆったりと入所者の相手をしている。所得の53%も税金にとられても、こんな福祉を誰もが平等に受けられる国を作上げたデンマークの国民はすごいと思いました。しかし、やはり財政引締め影も垣間見えるようでした。

HPIは [ひの社会教育センター](#) 検索で